

直接に與へられるもの

西田幾多郎

直接に與へられたものと云ふのは如何なるものを云ふのであるか。我々は此問題を論ずるに當つて先づその意味を明にせねばならぬ。既に與へられると云へば、何物かに對して與へられるといふことではなければならぬ。こゝに與へられるといふのは、我に對して與へられることである。我といふにも種々の意味があるであらう。こゝに我といふのは、考へる我即ち思惟我を意味するのである。それで直接に與へられたものといふのは、未だ思惟せない前の經驗といふことではなければならぬ。思惟作用といつても、單に思惟對象を映す心理的作用と考へるならば、思惟對象といふ如きものも、之に對して與へられたものと云ひ得るであらう。併しこゝに與へられるといふのは、思惟によつて構成せらるべく與へられるといふ意味である、即ち構成的思惟の所與といふ意味である。而してその與へられるものといふのは、單なる

思惟對象の如きもの、非實在的なものをいふのではない、又過去にあつたもの、未來に起るべきものをいふのでもない、現實に與へられるものをいふのである。現實に我に對して與へられるものと云へば、直に實在界といふ如きものが考へられるかも知れない、意識はかゝる世界に於て因果的に生ずるとも考へられる。併し所謂實在界といふのは思惟によつて構成せられたものに過ぎない。

普通には、右の如き意味に於て、直接に與へられたものとして、感覺とか、知覺とか、又は藝術的直觀とかいふものが考へられる。併し單一なる精神的要素としての感覺といふ如きものは、思惟の所作たることは心理學者も認めて居る。思惟に對して與へられる具體的意識としては、少くとも知覺の如きものを考へねばならぬ。知覺とは如何なるものであるか。心理學者は之を感覺の構成せられたものと考へる。併し知覺といふのは、單に主觀的な感覺要素の結合ではなくして、その中に客觀的意義を有つて居なければならぬ、客觀的對象を含んで居なければならぬ。例へば、空間的知覺にしても、感覺が空間的に構成せられて居るのではなく、此等の要素の結合によつて空間的延長が意識せられて居なければならぬ。空間的知覺が延長を有つて居るのではなく、延長を意識して居るのである。延長が意識内容として感覺を統一

して居るのである。勿論知覺に於ては、空間といふものが、未だ概念的に意識せられて居らぬと云ひ得るであらう、客觀的空間といふ様なものが未だ認識せられて居らぬと云ひ得るでもあらう。併し物が判斷の對象となる時、明かに之を知ると云ひ得るかも知らぬが、概念的に知られた時始めて意識せられるのではない。事實の知識に於ては、知覺の中に含まれたるものを判斷の形に構成するのである。知覺の中に含まれたるものは、概念的知識としては潜在的であり、不分明であるとも考へ得るであらう。併し之がために知覺内容を知覺内容として不分明と考へることはできない。知覺の立場からしては、概念は却つてそのあはき影といふこともできる。空間的知覺の例について云へば、數學的空間と異なつた物理的空間といふ如きものは、知覺の中に含まれた空間を、概念的に構成したものでなければならぬ。知覺せられた空間を離れて客觀的空間はない。若し知覺の中に客觀的なものが映じて居らぬといふならば、物理的眞理の如きものは成立し得ない。思惟のみによつて物理的眞理を構成することはできないのである。屢云はれる如く、若し知覺の中に含まれたる延長の意識が、他の感覺要素と同列的な筋肉や關節の感覺といふ如きものとするならば、それは内面的統一の用を成すことすらできない。従つて知覺といふ如き

ものも成立することはできないのである。

右の如き理由によつて客觀的意義を含むと考へられる知覺とは如何なるものであるか。普通に知覺といへば有限なる經驗内容と考へられる。併しそれは如何なる意味に於て有限と云ふのであるか。時間、空間、個人によつて限定せられたものとするならば、それは有限なる經驗内容といひ得るであらう。併し斯くいふ場合に知覺といふのは、心理學的に作爲せられた意識現象であつて、眞に思惟我に對して與へられたといふ意味に於ての知覺ではない。我々の自己を空間、時間、因果の世界に對象化し、かゝる世界に於て我と物と相働き、知覺とは物が我に働くことによつて生ずる經驗的自己の現象に過ぎないと考へるならば、それは時間、空間、個人によつて限定せられて居るのは云ふまでもなく、物の第二次的性質とも考へ得るであらう。この場合我々が之に就いて思惟するといふことは、之を越えて第一次的性質を知ることである、思惟の對象界に入ることである。思惟作用といふのは、自己の作用であると共に、知覺を越えて知覺外を知る作用とも考へ得るのである。思惟といふにも種々の意義を考へ得るであらう。普通に考へられる如く、それを反省的思惟の意味に解するならば、思惟といふのは、單に主觀的意識作用であつて、之に對して知覺の如きも、

直接の所與として考へ得るであらう。併し思惟といふのを、カント哲學で云ふ如き構成的思惟の意義に解するならば、主觀的意識に對して客觀的世界即ち經驗界と考へられるものが、既に構成せるものであり、主觀的なる意識現象といふものも、思惟によつて構成せられたものと云ふの外はなからう。此の如き思惟に對しては所謂知覺といふ如きものは構成せられたものであつて、與へられたものではない。此の如き思惟に對して與へられるものは、認識構成以前のものでなければならぬ、カントの所謂物自體の如きものでなければならぬ。併し物自體といふものが、全く認識以前として、何等の意味に於ても我々の意識に含まれて居ないものとするならば、我々の認識の限界として考へるとすらも不可能である。何となれば、限界といふとは、高次の立場の直覺に於て、始めて云ひ得るのである。眞に構成的思惟に對して與へられたものは、構成的思惟の内容を内に含んだものでなければならぬ。構成作用に對して與へられるといふには、單に材料として與へられると考へることもできる。此の如き場合、與へられるものは、偶然的と考へられる、形式と材料とは互ひに外的と考へられる、材料は形成作用に對して全然受働的たるを免れない。併し嚴密に考へれば、形式と材料とは何處までも無關係とは考へられない。全然受働的なる材料はない、

全然受働的なるものは材料となることもできない。特に藝術の理念の如きものに至つては、材料を離れてあるのではない。色や形を離れて畫家の理念はなく、音を離れて音樂の理念はない。藝術的理念は形式と材料との統一にあるのである。我々の思惟が認識の形式として經驗内容を構成するといふのは、如何なる意味に於て構成するのであるか。與へられたる經驗内容は單なる材料として與へられるのではない、單に受働的なるのではない。直接に與へられたる經驗の中に含まれたる關係によつて、我々の經驗界が定められるのである。此意味に於て構成的思惟の作用は一種の藝術的形成作用の性質を有すると考へることができる。感覺的性質は往々物理學的立場から見て、主觀的とか偶然的とか考へられる。併し感覺の客觀性、必然性によつて物理的世界が立せられるのである。物理的世界の立せられるには、感覺間に不變の關係があると考へられねばならぬ。而して此の如き不變の關係が單に一個人の意識範圍内に於てのみならず、各人の感覺の間にも共通であると考へられねばならぬ。斯くして始めて物理的世界が立せられるのである。勿論、異なる人ど人との間に感覺の異同を直接に比較することはできぬ。時には或人が赤と感ずるものを、他の人が青と感じて居ることがないとも云へない。併し感覺的性質が單に

それだけの意味のものであるならば、客觀的實在としての物理的世界は成立し得ない。我々が一つの物理的世界を信するならば、二人の人の間の感覺の相違といふのは生理學的に説明せられねばならぬ。眼の生理的缺陷から色盲があるといふことは却つて同一の物理的原因から同一の感覺が生ずるといふ感覺自身の連續性を證明することとなるのである。他人と自分との感覺的性質の異同は直に比較できないかも知れない。併しすべての人の間に同一の物理的原因から同一の感覺を生ずるといふ感覺自身の客觀的連續性が認められて、始めて物理的世界が立せられるのである。物理學的因果といふのは、單に或一個人の意識内に於て、同一の感覺的結合が繰り返されるといふのではない、如何なる人の意識に於てもといふ意味でなければならぬ。斯く考へねばならぬとするならば、物理的世界の成立するには超個人的意識の統一、即ち純粹自我の統一といふ如きものが基礎とならねばならぬ。物理學的法則といふのは、超個人的意識の立場から見た感覺不變の關係でなければならぬ。併し斯く云ふ場合、超個人的意識といふのは單なる論理的意識であつてはならぬ。カントの云つた如く、範疇と「圖式」時との結合によつて、經驗的知識の構成原理が成立するのである。單なる形式的思惟にては、經驗其者の内面的連續性に客觀性を

有する物理的世界の構成せられないのは云ふまでもなく、時間空間運動の根本概念の上に成立する力學的世界をも構成することはできぬ。同じく思惟といつても、客觀界を構成する客觀的思惟と、意識の一作用としての主觀的思惟とは同一でない。客觀的思惟は創造的でないければならぬ。範疇と圖式時とを綜合する純我の統一は創造作用でなければならぬ。二つの獨立せる形式の單なる結合から獨立せる一つの客觀的世界が成立することはできぬ。私はカントの純粹統覺の徹底せる意義をフイヒテの事行の概念に求めたいと思ふ。一方から見れば形式的思惟の立場は構成的思惟に對して、一般的と考へられ、構成的思惟の内容は形式的思惟の單なる材料とも考へられるであらう。併し構成的思惟の内容が客觀的對象として主觀的思惟の目的となり、主觀的思惟が之に合ふことによつて、眞理となると云ふには、形式的思惟の立場は構成的思惟の立場の中に含まれて居ると考へねばならぬ。すべて客觀的眞理を認識するといふこと、即ち認識作用といふのは、或一つのアプリオリの立場から、アプリオリのアプリオリの立場に於て、之を包容する一層高次の立場に移り行くことでなければならぬ。構成的思惟と反省的思惟との間に、既に右の如き關係があると思ふのであるが、所謂物理的世界は單に構成的思惟によつて構成せられるの

ではない。物理的世界の成立するには感覺との結合がなければならぬ。而してかゝる結合は唯行爲的主觀の立場に於て可能なるのである、運動によつて思惟と感覺とが結合するのである。意志の自覺なくして力の概念は成立しない。私が意志するといふことは、私の考を經驗界に實現しようとするのである。意志の概念は我々の思惟と經驗内容との結合から成立つ、意志を實現するといふのは經驗界を自己の考の如く變ずることである。我々が意志として自覺する現象の成立するには、思惟と經驗内容とを統一するアプリアリがなければならぬ。或は此の如き意志の現象といふ如きものは主觀的幻覺に過ぎないとも考へ得るであらう。併し意志といふのは單なる概念でもなければ又力の世界に還元せらるべき現象でもない。意志は思惟と感覺との單なる複合物ではない。思惟は經驗を超越して居る。是故に思惟の内容は一般的と考へられ思惟の作用は自由とも考へられる。併し全然現實の感覺的意識を超越せるものは、思惟對象であつて、思惟作用ではない。私が考へるといふことは現實の意識の中に超現實的な意識内容を含むといふことでなければならぬ。斯く現實の意識の中に超現實的な内容を含むといふことは、現實の意識の中に現實ならざるものがあることを意味して居る現實の意識の中に超現實的立場の

含まれ居ることを意味して居るのである。現實とはかゝる統一點をいふのである。我々が思惟する時、一方に現實を離れると考へられると共に、現在の感覺を離れるのではない。而して此の如き思惟作用が成立するには、既にその根柢に於て廣義の意志のアプリオリを認めねばならぬのであるが、嘗に現實に於て超越的對象を含むのみでなく、現實其者を考へる時、思惟はその根元たる意志の内容を目的とせねばならぬ。所謂經驗的知識の世界は斯くして成立するのである。對象の内在を本質とする我々の意識現象は、それが感覺であつても、知覺であつても皆意志のアプリオリに於て成立するのである。所謂意識現象とは最初に與へられる經驗界である。意識現象が直ちに直接經驗とか純粹經驗とか考へられるのも之に由るのである。併し所謂意識現象といふのは意志のアプリオリによつて構成せられたものであつて、即ち意志の射影であつて、意志自身が自覺した時、意志我に對しては與へられたものでなく、構成せられたものである。我が所謂意識の中にあるのではなく、意識が我の中にあるのである。所謂意識現象とは、何處までも、それ自身に於て全きものではない。その背後はいつでも超意識界に連續して居る。我の意識が成立し、我の意識界といふものを知つた時、我は既に我の意識界を超越して居るのである。我々が客觀界を

知るといふことは、自覺に於て我の内に反省し行く如く、超意識界に進み行くのである。此過程を我々は經驗内容を思惟し行くといふのである。我々が性質の範疇に當はめて「此物が赤い」といふ時、今見て居る「赤」の色が物の客觀的性質であるといふことを意味して居なければならぬ。而して現在見て居る「赤」の色が、何等かの意味に於て客觀的であるといふには、その物が我々の思惟や意志によつて如何ともすることのできない、それ自らに於て獨立のものであるといふことを意味して居らねばならぬ。それが單に意識内の現象であるとしても因果的に何等かの客觀的根據を有つたものでなければならぬ。而して經驗内容がそれ自らに於て客觀性を有つといふことは、それ自らに於て連續的であるといふことを意味して居らねばならぬ。無論單に客觀的といへば、數理の如きものは云ふまでもなく、表象自體の如きものであつても、客觀的と云ひ得るであらう。縱、表象自體の如きものは、我々の思惟に對して何等の力を有たず、寧ろ主觀的思惟の所作と考へられるかも知らぬが、數理の如きものに至つては、明にそれ自身の中に一種の内面的連續性を有つといふことができる。汎して我々が或事實的眞理を認めるといふ場合、その客觀性の根據が數理の如く單に理性の創造ではなく、思惟によつて達するところのできない、それ以上の獨立せる連續

性を有つと考へねばならぬ。感覺なくして思惟作用はない、見方によつては、感覺が思惟の對象となるのみならず、又思惟の原因となるとも考へ得る。單なる對象は作用として働くことはできないのである。苟も感覺が何等かの客觀性を有し、認識を制約するといふには、それ自身に於て統一ある連續として、構成的思惟を之に従へ得るものでなければならぬ。感覺が「知覺豫料の原理」に當はまつて客觀性を得ると考へられるも、思惟は感覺と結合することによつて、客觀性を得るのである。感覺が惟に對して *Anspruch* として與へられと云ふのは、此立場から云ひ得るのである。我々の構成的思惟に對して眞に與へられるといふべき感覺は、此の如き超思惟的連續でなければならぬ。一方から見れば、思惟の内容は一般的にして、特殊なるものを含むと考へ得るでもあらうが、具體的實在に於ては、一般なるものは特殊なるものの中に含まれ、その關係の形式となる、即ちその發展の手段となるのである。右の如き經驗内容自身の内面的連續の立場に於て、感覺の背後にも無限なる内面的連續を見る時力の概念が成立し、物理的世界が構成せられるのである。前に云つた如く我々はい々の主觀的意識界を越えて經驗内容其者の客觀的世界を信じ得るのは之に由るのである。或一つの感覺内容が自己同一として考へられるのは、同一の範疇に當は

まつて、斯く考へられると云ひ得るでもあらう。併し何故に之を斯く自己同一として考へねばならぬのであるか。若しそれが我々の自由であるといふならば、經驗界の客観性といふ如きものは失はれなければならぬ。縦、それが既に思惟によつて構成せられたものなるが故としても、單に構成的思惟によつて經驗界の客観性を立することはできぬ、そこには感覺の制約がなければならぬ。元來、自己同一といふのは、實在を認識する構成的思惟の範疇でなければならぬ。而して此の如き範疇は自覺の體驗なくして成立することはできぬ。構成的思惟の範疇は即ち純我の自覺の形式である。併し經驗内容が自己同一の範疇に當はまつて、客觀的實在が構成せられるといふ時、そこに思惟と感覺とを包む先驗的統一がなければならぬ。而してそれは單なる純我といふ様なものではなくして、純粹意志といふ如きものでなければならぬ。我々の自己は所謂自覺に於て眞に自己を知るのではない、單なる知的自己は尙對象化せられたものである、眞の自覺は意志の體驗其者でなければならぬ、即ち意志自由の自覺にあるのである。眞の我は知る我ではなくして働く我である、知るといふことも働くことではなければならぬ。見ることも聞くことも考へることも、我の働きである、見又は聞く我は考へる我である、我は此等の作用の統一でなければなら

ぬ。思惟と感覺との統一は、この働く私の立場に於て成立するのである。此立場に於て、感覺内容が「同一」の範疇に當はまつて一つの連續體と考へられるのである。働く私は考へる我を含むが故に、働く私の立場に於て顯はれるものは、思惟の範疇を含まないものでなければならぬ。感覺の自己同一は、働く私の自己同一である。之によつて感覺の連續の世界が考へられるのである。感覺は思惟に對して非合理的なると共に、之を制約して客觀界を構成するのである。意志私の立場に於て現れ來るものは、すべて力でなければならぬ。我々の意志といふのは主觀的現象であつて、意志の自由といふ如きことは、幻覺か錯覺に過ぎないと考へられるから、意志のアプリオリによつて、力の世界が構成せられるといふのは、異様に感じられるのであるが、單なる眞理の世界から作用の世界は出て來ない。超越的思惟によつて眞理の世界が見られる如く、超越的意志の立場によつて力の世界が見られるのである。主觀的意志といふのも、此立場に於て成立する一面の現象に過ぎない。主觀的意志は之を對象化し得るかも知らぬが、純粹意志を對象化することはできぬ。否、主觀的意志といへども、作用が作用を對象化する意志の立場に立つことによつてのみ、之を對象することができるのである。

構成的思惟によつて經驗界が構成せられるといふ時形式と内容との關係は互に偶然的ではない。我々の經驗界を構成するアプリアオリは思惟と感覺との内面的統一でなければならぬ。此點に於て藝術家の創造作用とその性質を同じうすると思ふ。構成的思惟も既に創造的と云ひ得るでもあらうが感覺内容を含む創造作用ではない。我々の經驗界とは、これに反し思惟が經驗内容の内から構成したものである、思惟によつて見られた經驗内容の世界である。純粹視覺によつて藝術家が成形美術の世界を見出す如く、構成的思惟によつて我々は客觀的經驗界を見出すのである。成形藝術家が手を加へた眼を以て見る如く、物理學は思惟を加へた感官によつて見るのである。若し我々の意志が感覺の中に思惟を包むとするならば、兩者共に意志の立場に於て成立するのである。藝術の對象界は主觀的と考へられるが、藝術の對象界は、その客觀的たる點に於て所謂認識對象界と讓る所はない、否一層客觀的と考へることができぬ。それで構成的思惟に對して直接に與へられるものは、所謂知覺の世界の如きものではなくして、藝術家の見た如き直觀の世界でなければならぬ、即ち意志の對象界でなければならぬ。我々が思惟によつて構成して行くといふのは、既に其中に含まれたものを見出して行くことである。我々の認識作用といふの

は此の如き直接に與へられたものの發展の過程と見ることが出来る。すべて我々の主觀的作用に對して、直接に與へられるといふべきものは、此作用の立場を包み而も此立場によつて達すべからざる高次的立場の對象界でなければならぬ。反省的思惟に對して、構成的思惟の世界が此意味に於て與へられた客觀界となり、構成的思惟に對して意志の世界が此意味に於て與へられた客觀界となるのである。或一つの立場に於ては、その對象界はそれ自身に全きものと見ることが出来る。他の立場によつて與へられるものは之に對して外的たる材料に過ぎない。各知識のアブリオリが獨立であつて、此等を統一するアブリオリのアブリオリといふべき立場がなかつたらば、一つの立場に對して客觀的に與へられるといふべきものはない。知識が己自身を完成するため、その客觀的目的として與へられるものは、アブリオリのアブリオリの立場に於てでなければならぬ。形式と内容を内面的に統一して、新なるアブリオリを構成するのは、此の立場でなければならぬ。そこには一種の藝術的創造作用の面影がある。或一つの知識の立場に對して、客觀的に與へられるものは、藝術的創造作用と同様の立場に於て與へられねばならぬ。内容ある知識の成立は單に *diskursiver Verstand* によるのではなく、*intuitiver Verstand* によらねばならぬ。外に自

然界を構成する力や生命は、自己の中に於て直觀せられたものである。與へられたものは求められたものであるといふが、一つのアプリアリはそれ自身に於て全きものであつて、他を求める必要はない。認識發展の要求はアプリアリのアプリアリの立場に於て、認識の目的から起つて來なければならぬ。たとひ或數理の問題が我に對して解くべく與へられるといふ場合でも、數理的思惟が我を包んで居なければならぬ。我が數理其者たらば、之に對して數理の問題が與へられる要はない。又我が時間、空間によつて限定せられた單なる心理的現象ならば、之に對して數理の如きものが與へられ様はない。知識の客觀性の要求として無限に求められ、與へられるといふのはアプリアリのアプリアリの立場に於て云ひ得るのである。すべて我々の意識現象は此立場に於て成立するのである。意識現象はそれが如何に小なるものであつてもその中に無限の發展を含み、その本質に於て創造的である、意識現象が一度的と考へられるのも之に由るのである。構成的思惟に對して客觀的に與へられるといふものが藝術的内容と同性質と考へるには、多くの異論があるかも知らぬが、構成的思惟が客觀的經驗界を構成するには、その根柢に主客合一の立場、事行の立場がなければならぬ。此立場から見れば所謂藝術的内容は部分的ではあるが、却つて

具體的客觀的といふことができる。此立場に於て與へられるものは、藝術的直觀の形に於て與へられるのである。

以上論じた如き譯であるから、思惟我に對して直接に與へられた客觀的或物として立つものは、思惟によつて構成せられた知覺の如きものではなく、主客合一の藝術的直觀の如きものでなければならぬ、即ち思惟に對立する外界ではなく、却つて之を包んだものでなければならぬ、思惟我を含んだものでなければならぬ。此の如きものを所謂直接經驗とか純粹經驗とかいふべきものであらう。此の如き直接に與へられた意識の内容は時間、空間、個人の範疇によつて限定せらるべきものではない。我々の現實の意識は單に認識對象の世界に連なつて居るばかりでなく、直に超認識の世界に連なつて居る。現實の意識は無限に深く大なるものの中に浮んで居るのである。我々が之を限られたものとしてと考へるのは、構成せられた有限の自己を中心として考へるが故である。我々は通常我々の身體と結合した心理學的自己を中心として考へる。併し此の如き自己が意識して居るのでないことは云ふまでもない。自己の背後に附着せる物質的陰影を除去して、純粹な意識の内面的統一とし

ての自己を考へても、其者が有限なる意識の一統一として見られた時、それは既に對象化せられた自己であつて、現實に意識する自己ではない、それは省みられた自己で、省みる自己ではない。現實に意識する自己は、何處までも省みることのできない自己である。或は自己が後から省みられた時、過去に射影せられて對象となるも、その當時に於ては、それが意識する自己であつたと云ふでもあらう。併し眞の我はその時、その時に無限であり、自由である。此の如き我の全體は記憶の對象として後に省み得べきものではない。後に想起せられた我の内容は、有限でもあらう。併し此故に前に働いた主觀の内容が有限であつたとは云はれない。我々が働く自己を一度的と考へるのは、その内容の無限なるが故である。正しく云へば、働く自己は對象化せられた自己に對して、高次的なるが故である。高次的なるが故に達すべからざる極限となる、一度的にして繰返すことのできないといふのは、認識對象として考へる故である。以上は意識の背後に統一的な主觀を置いて考へたのであるが、又所謂純粹經驗論者の如く、直接の經驗に於ては未だ主客の區別ない單に經驗といふ如きものがあつて、其等のものが後に如何に相關係するにせよ、その時に於ては有限なるものとも考へ得るであらう。併し我々が或經驗内容を有限として見るには、何等かの立

場によつて限定して居るのでなければならぬ、即ちそれは既に直接の經驗とは云はれないのである。時間、空間の形式は、カントも之を直覺の形式と考へた如く、經驗は之によつて與へられると信せられる。我々が直接の經驗を限られたものとして見る時、之れによつて限定して居るのである。併し眞に直接の經驗を與へる「時」は、カントの云ふ如き「時」の形式ではなくして、却つてベルグソンの所謂純粹持續の如きものでなければならぬ。上に云つた如く、與へられた現實の經驗の内に、超時間的なものを含んで居るのである。或は直接經驗の内容は時間空間の形式によつて限定すべきものでないとしても、意識せられたものは、未だ意識せられない無限の内容に對して有限と考へざるを得ないと云ふでもあらう。心理學者が考へる如く、我々は意識について種々の程度とか、範圍とかいふものを考へ得るであらう。意識の焦點にあるものを最も明に意識して居ると考へるのであるが、單に焦點にあるもののみが意識せられて居るのではなく、その周圍にジェームスの所謂意識縁暈といふ如きものが附着して居ると考へ得る。而して更に此範圍を越ゆれば、全然無意識の世界となり、意識せられざる世界の内容は、我々の有限なる意識の範圍に對して無限と考へられる。併し我々は是に於て一つの解き難き矛盾に撞着せざるを得ない。我々は如

何にして意識の内外を比較し、意識せられたものを有限と考へることができるのであるか。かゝることが可能なるには、我は意識の内外を統一し比較し得る立場に立つて居なければならぬ。一方に於て、我は意識内のみを知り得ると考へ得ると共に、我は意識外を知り得ると考へねばならぬ。アウグスチヌスが我々は神を求めぬが故に、既に神を知つて居るのであるといふ意味も此になければならぬ。普通には、我々は思惟によつて意識外を知り得ると考へ、感覺以内を意識内と考へて居る。感覺なくして意識のないことは云ふまでもない、思惟も意識として何等かの感覺を伴はねばならぬ、感覺が思惟内容を代表することによつて、思惟し得るのである。しかし所謂感覺からは、思惟の作用の生じないのは云ふまでもなく、之によつて思惟内容を代表することすら不可能である。所謂感覺といふのは、却つて意識内容の限定せられたものに過ぎない。此意味に於ては意識は感覺内にあるのではなく、感覺は意識内にあるのである。我々が意識を限定せられたものとして考へた時、之を限定する意識がなければならぬ。所謂意識の内外といふのは、限定する方面と、限定せられる方面との對立に過ぎない。而して意識を限定するものは意識の外にない、所謂意識の背後には、此意識を包み、之を限定する意識がなければならぬ。所謂意識の根柢に

は、主客合一の意識即ち直觀があり、純粹活動の意識がある、所謂意識は此立場の上に於て成立するのである。眞に與へられた直接經驗とか、純粹經驗とかいふべきものは、此の如き意味に於て無限の内容を含んだものと考へねばならぬ。我々がこの深みに入込めば入込む程、そこに與へられた現實があるのである。それは主觀的に云へば、對象化することのできない自己であり、客觀的に云へば、反省し盡すことのできない直接の所與である。そこに主客合一の直觀、純粹活動の意識があり、すべての知識の根源があるのである。現實に働く我に對して與へられたものは、否主客合一の立場に於て與へられたものは、所謂意識界ではなく、その背景に超意識界を含んだものでなければならぬ。我々が行爲的主觀、即ち働く自己の立場の上に立つ時、我は既に超意識界を對象として居るのである。而して眞に現實の所與といふのは、この働く自己に對して與へられたものの外にない。我々が後に想起し、思惟するものは、皆此に含まれて居るのである。物を見て居る時、我々は視野に現れて居るものだけを見て居るといふ。併し眞の我は單に見る我ではない、かゝる我は考へられた我である。思惟的我を離れ、我を忘れて見る我は、行爲と結合した我でなければならぬ、表出運動と結合した純粹視覺の如きものでなければならぬ。此の如き視覺内容は超知

識的でなければならぬ。普通に見る我といふのは、後から知的内容に直し得る視覺の内容の統一を考へるのである。併し此の如き主觀は要するに考へられた主觀に過ぎない。私が現在物を見て居る時、私は知的主觀として知的内容を有すると共に、精神的實在として無限の根柢の上に立ち、種々の對象界を有つて居る。我は「時」によつて限定せられて居るのではなく、却つて「時」は我によつて限定せられて居るのである。一次元的直線の如き無内容なる「時」といふ如きものは單なる坐標に過ぎない。眞の「時」は人格的でなければならぬ。

—

上に述べた如く、思惟に對して直接に與へられるものは、所謂感覺といふ如きものではない。感覺といふ如きものは、却つて思惟によつて構成せられたものである。常に感覺のみならず、有限なる意識の範圍といふ如きものも、既に思惟の構成によると云ひ得るであらう。無論思惟といふのを、單に反省的思惟の意義に解するならば、所謂經驗界は與へられたものと考へられるであらうが、構成的思惟に對して與へられるものは、所謂經驗界ではなくして、主客合一の直觀界でなければならぬ。或は之

れをリッケルトの云ふ如き「問なき肯定」[das fraglose Ja]の立場の對象界とも考へ得るであらう。併し眞に主客合一の直觀の立場純粹活動の立場は、かゝる立場に對立するものでなく、寧ろかゝる立場を包むものでなければならぬ。主客合一の立場に於て、主客對立の立場が成立するのである。然らざれば我々は「問なき肯定」を意識することはできぬ。或は主客合一の立場は如何にして意識し得るか云ふでもあらう。

主客合一の立場に於ては、知即行である、フイヒテの云つた如く働くことが知ることである。我々は我々の自覺の意識に於てその證明を有つて居るのである。此の立場は知的立場を包むが故に、「問なき肯定」の外に、知的内容に分析することのできない無限に深い對象界を有つ。我々は知的立場を顧みないで、直ちに藝術的内容の世界に入込むことができるのである。與へられたものは「所與の範疇」に當はまつて知識となること云ひ得るであらうが、「所與の範疇」は單なる思惟の形式ではない。此物が赤いとか、青いとかいふには、思惟以上の直觀が加らねばならぬ。此範疇をして範疇たらしめるのは、かゝる直觀の客觀性、超越性によるのである。直觀の内容との一致といふことが、この範疇の意義であり、目的である。思惟に對する極限は單に思惟より成立するのではない、そこには何時でも思惟よりも高次的な立場がなければならぬ。

此立場は常に思惟より高次的であるのみならず、却つて之を包容し、思惟も此立場に於て成立するのである。大なる思惟の基には大なる直観があるのである。

直観を右の如く考へるには、多くの異論のあることであらう。私はその意義を明にするため、少しく想起との關係を論じて見よう。普通には、我々が直観したものを、後に想起すると考へる、一度意識から消え去つたものでも、記憶の中に保存せられ、幾度にも意識の中に呼び起し得ると考へる。我々が思惟によつて直接の經驗内容を構成するといふにも、此の如き作用をその間に挟まねばならぬ。アウグスチヌスは記憶について最深い意義を認めた。我々は我々を創造したものを求めて記憶の宮殿に到る、そこには我々の知覺したすべての物のみならず、考へるすべての物がたくはへられる、それは廣い測り知ることのできない奥院であると云つて居る (Confess Jones X 8)。併し所謂現實の意識の背後に超現實的なものが含まれて居ないならば、如何にして我々は後に此意識を想起し、種々なる關係に於て、之を組織し統一することができるであらうか。若し意識がその時々のものであれば、何者が過去の意識と現在の意識とを結合するであらうか。之を結合するものが亦意識であるとするれば、その意識も亦現在の外に出ることはできない。過去の意識を想起し之と現在の意識

とを比較するものは、超時間的意識でなければならぬ。我々は是に於て如何にしても過去を直観する意識といふものを考へねばならぬ、而してその力は又未來を見る力でなければならぬ。或は此の如き意識の基にも何等かの感覺的意識があると考へるであらう、意識の意識とは意識の綠暈の如きものと考へるでもあらう。併し我々の意識はいつでも一つでなければならぬ。二つの意識が同時に存在するのではない。我々が過去を想起する時、感覺は感覺の意味を失うて、之を構成する要素となつて居るのでなければならぬ。更に思惟の立場に進めば、種々なる記憶表象といふ如きものも、之を構成する材料となるのである。或一の意識が明になればなる程、他の意識の獨立性は失はれ行くのである。普通、感覺が意識の基となると考へられるも所謂感覺が意識の基となるのではない。具體的意識はいつも衝動の形に於て成立するのである、即ち廣義の意志でなければならぬ。斯くして始めて意識は内面的統一によつて成立するとか、對象を内に含むとか云ひ得るのである。而して衝動とか意志とかいふ形に於て、我々の意識は所謂空間、時間を超越して居ると考へることが出来る。意識が所謂「時」の中にあるのではなく、所謂「時」は意識の中にあるのである。意識の能動的統一、眞の時^レは意識の中に於て對象化することはできない。而して此

統一の自覺が我々の意志に外ならないのである。我々の衝動的意識の中に超時間的なるものの意識が含まれて居る、物力の意識も實は之によつて成立するのである、物力は所謂時に對して不變であり永久である。我々は衝動に於て物力に直接して居るのみならず、更に之を内に包んで居る。物が永遠に現在なるが如く、衝動も永遠に現在である。我々の所謂時とは眞の時ではない、四次元の世界に於ける坐標の一つの軸に過ぎない。物は物自身の時を有つが、世界線に於ての「時」は知ることはできない。現在といふのは、一方からは斯くいふ瞬間に既に過ぎ去つたものと考へねばならぬと共に、一方からはジュームスの云つ如く我々がその上に坐して「時」の兩方向をながめ得る鞍の背の様なものであると考へることが出来る。意識の現在と云つても、一直線の或一點といふ如きものではない、即ち數學者の點といふ如きものではない。對象を内に含むと考へべき意識は自ら動的である、自分の中に包みきれない内容を有つて居る、全體を部分の中に含んで居る。動くものは或一定の方向に向つて動かねばならぬ。是に於て一次元的系列が構成せられ、之によつて過去と未來とが對立し、その中心として現在といふものが考へられる。此故に我々の意識が自己の現在の中に無限に深きものを含むといふことによつて、「時」の意識、否時其者が成立

するのである。私は此に於ても亦アウグスチヌスの深い考を想起せざるを得ない。元來過去とか現在とか、未來とかいふものはない、唯過去に關する現在現在に關する現在未來に關する現在といふものがあるのみである、過、現、未は我々の心の中に存在して居る、過去は記憶に於て、現在は直覺に於て、未來は希望に於て現在であると云つて居る (Confessiones. XII. 20.)。過去は既に過ぎ去つたものであり、未來は未だ來ないものといふが、所謂現在とは達すべからざる數學的點の如きものに過ぎない。眞の現在は所謂過、現、未を含んだ一つの活動でなければならぬ。此立場に於ては何時でも永遠なるもののみ實在である。現在とはこの實在の深き底を指すに過ぎない、それは達すべからざる深底たると共に、我はいつもその中にある。我々が現在から未來に移り行くといふのは小なる中心から大なる中心に移り行くに過ぎない。我々はいつでも現在を中心として過去と未來と順序立てて行くが、此時、現在は我の外より來り我の外に出で行く一線の上を動いて行くのではない、現在は深く深く我の中に入つて行くのである。具體的經驗は我々の内に向つて流れるベルグソンの所謂內面的持續の如きものである。所謂意識一般の立場によつて、之を認識對象界に映し

た時、此對象界と内面的時との接續點が現在となる。此結合點が超越的意識として、外面的方向に於て認識主觀であり、内面的方向に於て超越的意志である。アウグスチヌスの云ふ如く、時はいつでも現在を中心として考へられるのであるが、その内容によつて種々の時が成立するのである。之によつて種々の客觀的世界が構成せられる。我々が一つの客觀的世界を見て居る時、我の背後にいつでもかういふ「時」の流がある。所謂認識主觀の立場即ち意志の自己否定の立場によつて、此流が閉ぢられた時、そこに客觀的對象界を見、此流が開かれたる時、そこに意識の流の世界、内面的持續の世界を見るのである。我々の意識現象は之を認識主觀の立場に於て見た時、所謂「時」の範疇に當はまつて考へられるが、一方に於てはいつでも超時間的なものに接して居る。「時」を去つて還ることなき無限の系列と考へられるのは、反省することのできない無限に深きものへの關係を示すのである。知的主觀といふも一つの點ではなく一つの線である。我々が自己の主觀的作用を時間の上に生滅すると考へるのは、此の深き反省することのできない底より見て居るのである。或は時を超越する意識といふといふ如きものは、考へることができぬと云ふであらう。併し我々がこの深き奥底に入れば入る程、時を超越し又自他を超越する。私が此机が私の眠れ

る間にも儼存して居たと信せざるを得ないのは、之によるのである。此立場に於て客觀的記憶が可能となる、記憶の一般的妥當性が成立つのである。然らば、如何にして私が眠れる間にも此机の意識があつたか、如何なる形に於て意識せられて居たとかといふ疑問も起るであらう。併し我々が或目的を意識して事を成す時この目的は始より終りまで働いて居ると考へ得るのである、目的が己自身を發展し完成しつゝあると云ひ得るのである。我々の意識に統一といふものが無いと云ふならばとにかく、若し我々の意識が統一によつて成立し得るとするならば、我々の根柢には所謂眠れる間にも覺めたるものがなければならぬ。意識一般は何時でも現在である。前後の意識の間にも間隙があつたと知るのも、亦此意識によるのである。目的的统一としての自己の根柢は流れ去るものではない、何時でも働いて居るのである。元來意識統一といふのは目的的统一を意味するのである。而して目的的统一は何時でも現實を越え 指示するものがなければならぬ。現れものだけに全いものとするれば、それはもはや目的的ではない。目的的统一は何時でも無限の根柢に結合して居なければならぬ。自己といふのは此の如き無限の流への結合點に過ぎない。例へば、眞理は何處までも、未完成のものである、無限の進行である。我々が或一つの眞

理を考へる時、眞理への意志の上に立つて居るのである。此意志は時を超越して居る、何時でも現在である。知的主観に於ては、尙我々が考へない時があると云ひ得るであらう。併し我々が如何にしても意志主観を離れることはできぬ。我々に無意識の間があつたと考へるのは、知的主観の立場の上に立つ故である。自己の人格は無意識の間にも生長しつゝあるのである。此机が昨夜私の眠れる間にも連続して居たといふ確信も、此上に成立つのである。此の如き主観は假定に過ぎないといふかも知れない。併し此の如き假定は避けることができぬ。何となれば、斯く云ふ時既に此立場の上に立つて居るのである。之を假定とするならば、すべての主観も假定に過ぎない。感覺を離れて意識現象はないといふも、單に感覺のみの意識はない。具體的意識に於ては、感覺の底に無限なるものがなければならぬ。感覺といふも無限なるものの自己限定の過程である、何處までも限定せられて行くべきものである。我々の感覺は何處までも行先を有つて居る、我々の感覺の底に含まれて居る無限なるものは、永遠の過去から永遠の未來に亙つて動きつゝあるものである。かゝる作用其者は、瞬時も止むことなきものである、物力が働かざる時のないのど一般である。心理學者は意識の範圍を有限と考へ、極微知覺を假想として反對するも、昨

日の知覺は直に今日の知覺に連なり、昨日の思惟は直に今日の思惟に連なる。之を斷られたるものと見るのは、外より考へるが故である。その間を繋ぐ爲に考へられた物質こそ、假想たるを免れない。心理學者の所謂意識の範圍とか、程度とかいふのは、後に反省し得る範圍を云ふに過ぎない、又反省し得ないとしても、意識があつたと推論し得る範圍をいふのである。併し意識の根柢は斯くして盡くすことはできない。知的對象界に持ち來すものは既に對象化せられたものである。その背後には永遠に働きつゝあるものがある。永遠の現在がある、何處までも深い奥底がある。反省によつて達することのできない此の深き奥底が、反省せられた時、或はそれが本能と考へられ、或は物力と考へられる、而して本能や物力は絶えず働きつゝあると考へられる。絶えず働きつゝあると云ふことは、知識の立場から云へば達することのできない深い奥底といふことである。「時」によつて之を斷つことはできない、「時」はそれの中に消え行くのである。我々が眞に「時」のない立場に到達した時、自己の意識に對して見たる本能や物力の陰影は消え失せて、主客合一の一直觀となるのである。無論直觀の立場に於ても、直觀の中に入つたものと、入らないもの、即ち直觀せられものと、せられないものとの區別が考へられるであらう。例へば、如何なる藝術的創作も

藝術的内容の一部分を示すものである、藝術的内容其者は無限でなければならぬ。併しかういふ場合、思惟の場合に於ての様に、我々は是に於て超個人的主觀に結合するのである超個人的主觀が働くのである。此立場に於ては、恰も黒きも色も色の一種であるかの様に、無意識も積極的意義を有するのである。意識の根本的形式を意志と見れば、無意識はいつでも意志の一部分を成して居るのである。

我々が直觀するといふ時、直觀の内容とし現れるものは、單に所謂感覺の内容ではなくして、如何なる場合にも具體的經驗の内容でなければならぬ。すべての立場を含んだ全我の意識内容でなければならぬ。後に想起せらるべきもの、思惟せらるべきものが既に含まれて居るのである。我々が後に想起し、思惟するものは、皆此立場より發展し來ると考へねばならぬ。若し我々の心が永遠なる心の流の中にあるものとすれば、我々の知識は昔プラトリーの云つた如く、すべてがイデヤの世界のアナムネジスと考へ得るでもあらう。アウグスチヌスの云つた如く、神の創造以前に「時」はない、「時」も神の創造したものでなければならぬ。我々は此立場の中に於て、自己の人格的歴史を構成し、更に進んで客觀的歴史をも構成するのである。我々は現在をのみ

直觀すると考へられるが、我々が過去を想起するといふ時過去を直觀するのである。如何にしてかゝることが可能と云ひ得るか。思惟に於ては我々は時を越えて永遠の眞理を直觀すると考へることができる。この場合眞理は何處に保たれてあるか。それは當爲の世界に於てと考へねばなるまい。過去の事實も眞理としては此世界に保たれるのである。此故に我々は過去の事實を幾度も想起することができるのである。記憶に於て繰返されるものは、感覺其者ではなくして、感覺の背後に働きつゝあつたものである。後に之を想起するといふことは、既に此立場に於て含まれたものが發展することである。無論、記憶の内容は單なる思惟の内容ではない、記憶の内容は意志のアプリオリによつて成立つ事實の知識である。それは繰返されるのではなく、我々が深く自己の奥底に入込むことによつて構成せられるのである。記憶が記憶自身を保存するといふのは、自己自身を直觀し行くところである。思惟の對象に對しては作用は外的と考へられるが、記憶の内容に對しては作用自身が含まれて居る、作用が作用自身を省みるのである。歴史家が過去の歴史を構成する如く、知ることによつて前のものが構成せられるといふことができる。これは背理の様ではあるが、我々は時が何處に始まるかを知るのではない、現在の一點より一次元的に前

と後とに順序づけて行くのである。此線が繰り返すことができないと考へられた時、それが「時」である。而して繰返すことができないといふことは、自己との關係に於てのみ考へ得るのである。何故に自己は繰返すことができないと考へられるのであるか。主と客と合一するが故である、知る者が知られるものなるが故である。主と客と離れた時、即ち我々が一つ對象界を外に見る時、それは如何に大なるものであつても、之を繰り返し得ると考へることができるのである。併し前にも云つた如く、眞に主客合一の立場に於ては、すべてが現在である、時は其中に跡形を絶つのである。 *Creatans et non creata* の神は同時に *nec creans nec creata* の神である。昔アナキシマンデルの云つた如く、*Der Ursprung der Dinge ist das Grenzlose. Woraus sie entstehen, darin vergehen sie auch mit Notwendigkeit. Denn sie leisten einander Busse und Vergeltung für ihr Unrecht nach der Ordnung der Zeit* もいふべきである。反省的知識の立場に於ては繰返すことはできないと考へられるも、直觀に於ては終が始に含まれて居るのである。

此論文では自分のはじめ言ひ表さうとしたものを十分言ひ表し得なかつたのみならず、論證も極めて不十分である。徒らに雜誌の紙数をみだすまでである。